衣

後編

上

うつゝ衣を編續編まことに世々行ひ来
たるをおろかだりけれども今まで後編
拾遺乃書き神をつゝ行くよく舞ひよく
あきらかなる家ゝさづく苗姓い横井氏まで
時般まで並明く称し又姓寧ゝ称を後
暮水ゝ称をもの号をも者をいひもの者を
蓑屋といふもの蓑を半掃ゝ屋藩乃
世臣なり

巴人亭主人

人もうゑ
夢やうつゝ
うら乃梅　芭蕉翁

此一帖又ふれる人も
あるべしとて
かゝる芳墨
とゝのへ
羅臣

歌老辞

芭蕉翁は五十一まで世をさりのがれ江戸を去て
難波の西籍も五十二まで一期を終りなんとにより
末二年の辞世を残せりなど虚弱多病なるそれらも
年もうとくなりて今年は五十三とか秋も末なる者の
中絶えぬべきくさの逃るるはいつくまでの為をば
よせまつりとよみて欲られんもやさびしきるあとは
なりなりされども世に立交らんとなれどもまぶ
るるなりゆきて松も芽ふあたらしく一社
まつらるるまでなきくるまいやさびしとかくも
うちふるまへども年とくもれを出もるなどあるく

世界さまざまに當時のさまを詞をきゝねどそれい
かゝの行事へとて相問案内をむつゝうて拙お撲
も拳法もさいきい次く遠さられて奥の方より只一人
火燈蒲團の高きとうてすゝむひうまいりまさ
とゝめよ出る人も赤しーとれいいてもかのうち
しけるきるあゝ心六十の髪をまきあて小國
乃軍にむうい五十の彩よあーういく三十の津の
舞墓にまいつもいつもの赤を欲すやある家も
浄瑠璃おもしーゆも昔いかのまさりーをのとふと
老人こたに出ゝふとのうかの勇ましい拙い江戸
は面白うれとも今のふられ面白うめまく昔に我の
面白うりーあり出られく人まうまれぞ我も乃乃

よーこへき身のとき不ふあやとさひめうしたと
身の老を忘れされを出さられを出ゝまたまたまた
身の老と忘れて例のくまいらやられくあるふあ
あき泥色のとにあやまうもを出てんされを老ハ
ふるへーーと老ハ高るへうに二の境まこてにれ
うーやかーー蓬莱の店をさうさんに不老の藥
ハくとかうう不死の藥をあるといいうまく
一洗よ十代うもも不老ををれく何ゝ乃ん不死
うもも不老あは十るうもも見ぬーー秋仙
不死何のをあにく秋風よ向く感慨多ゝ心
と劇を訓をとしもさうをーー行ゝく
人ハよきゝのきひあゝ蓬莱ゝいーー四十

ふくれのゆたきにあそべきのうくにハおもしろきりうの
縞ありとらひし七十までハいつくあるべきことにいさ
ろろ物をきとりてあまり凄の耳にやすらんとも
我のとくましきまハ不用の長談議いふあらハさ
まさらんとて此編こゝに筆を拭ふ

四藝賦

琴碁書画ハ呉公の游話するへつこつにありと評
あるときハ名をとりて浄瑠璃子琴ハ二十五絃の
呉なるやうむりしことまハもつて区音宮人のかて
あきらめして十三絃を下せましに二十五絃のうそ
うきもいふなる山嶺の松風みやうきひらんさるも無絃

乃碁を握く意ありとそのみちんハこてもち上戸
の桔のせんと観く月なる性ハ似たりたり碁子
をける人ありとうふぬしきふあしさしむらひ
なる心の無念想なる士ハ今門に腰を折しなさの
つれを忘るまじても後ハあすの米櫃のあてなき
ぬすとぞられ夜ハ入日の西に迫りて膝の上までさし
入れてもいて地を造りむ出ましてそ始く
蚊の足み申さとさく葉子無子蟻の行るを聲
くみたまつ蛞蝓の家蔵らく無常を死人の上に観
大煙草子吸物ハいつの月まにこぼれんさくる
堪といふのとのれなくされのこひとのきとれを
訴よりのふうしうにさみ家中を去くあるに似たり

その婿師の資朽ちく七世孫にあひ〜は久しき
年月の別あるら哉とてきるのひとつもあり人は
大きなる損とらよ〜我りとより不株根みて山樂
をたくさるふるき根なりさてまたのつくるうめは
こてにあらねほ〜きるさまりまも上京の人は詩家
又書にのミまを深なる去箱もいやしうなる文弥丗
万世の後も名ふとも忘へ〜ふるとる人は日用乃
ものまも用申出て或は文庫の学ちに何なる何か備
山殘何百何十文と定家や様乃ふ法もいと口おく
又は山著利分きりよりの著編に表をまと文
徴好ふ法とのこたもまんけあきまさうて分の外
なるものあるふいうは世るるあるいはいとも無ふ系ふ

出るまにはよまは只よめ安きまて要なるへられまく
能筆のまりまて一字ふ二字ふ用もまたといふ京
こまりよ似て安下よまをしりうも又画まり位乃
ふまるふ好〜能画のくはまもいたるあ絵
乃男は痩まさ〜大津絵のまたは肥く表す
うき世絵は又平に好り菱川よ定り今西川よ定
まりまと〜〜猿蓑の屏風まはけ（罌粟）り牡丹ふまれ
ぬ花咲く人より大きなる雛のあのもよまり
まるて日さもるまさまれ又は藪寺ふまるあ
遠水よ波まく遠人の目鼻あまやに帆うけ丹
ふく波をまこれらも絵まよふいはさる〜
俳諧師の絵は上まの法あ〜て翁も

詠をのこしおくハ我も我流の手ぬかりてあて後世
緒の盃賛とうけて縁蓋の下をてありてこそかしこ
まりまよあられ恥志らぬさるありさかしき
まちらなハよしと吉田の法師と名理ある卓識人
なりてけれ年比硯の海をも遊ぶすまてある

隠居辨

箕山の月ハ高くして白へうれ五湖の水も流
して寛ふし　頃ハ紫陌に傳をとも大隠の市
まへうり菴ハ芙蓉の淀まよしいれとも小隠の
陵藪よりも浅しされと昔の隠者をせうす徳ある
人の世にもるふとむつしかり仇ある人の歎を恐れ
てさてしそ名をもうくうちを志る君のいのる徳とす
仇もなき人の身とく罪業五条に全ふ看板と出
よりとも同へきよしの人しそとふあさもなき人ハ
そむきも世をしむあさたれ掟ひのかくまんかも尋る
思のあれそこそあれさるをうき世にうれ都なる
中くまつりきはをするにてや世に隠居の
二字を名ぶむとみそうにちりき有明の月さしこみて
門ハ詩に閑させかりても人まあいしくとひてまう
さしむさふらうのある隠居めりうれ只をと社しぬへ
と出すりこ来する隠居をちしめて人もよしと
かしるなふむそれハ後世まもうてきある人乃
あぶ佛をこらへかにしてさ毋く なくするとみぬ

へしもあるて命つきあき人ハ朔日臨寝の志つ
つくしまも飽けを次第にそりくくくくし侘くれ
ハくいよゆりありこれハ医き友あれとあるれ
うなるに世中の清水にこそ世てそうく苦
とうへし始ハ仏ある人もあるし花山の上皇も
うらき名ハ立をのいそうとさるハ小[illegible]の神
まいくれ俗の語みハよりがあどけとりいよう
うとされを拙の始めてゆくまいよくやのるき
るにしてうあや我分の上をいくうしこま法を教
あり友詩に立しもあるも久しくれとあるとも毒ま
薬もあるねを人ハあるを世しみとも定てす雨蓑
のあるを深くしてすあるを思ひ思ひあるれて

世ハ人ハ我もあるを思ハ病ハ戸まされ今ハ引
くくるあるあるくさてもえるくふの名ハうるまく
られんハ南郭ハ学を吹りん此分のうへのそうし
うまは老と病と一箇にしてうき世の関ハのうれ
出るあるもれを誰をあれ行を駐くさのくハ
逃るくまるるなくなさりてと半題の門松をうう
桃ハ菖蒲ハ神あるくこての妹入りて法ハ
あるくあるんハいとそうるうあるをとく辞し
くれをいてハこくまようき世ハ店をきまくまこくハ
くくを遁世者とそいくへくさると押分て居去
くくふいるみ入るる名自なくくを非あき世乃
通称とるるて行竹桃竹のそちくへるるを勢ハ

叶りあて益なきすいはあるをよしとする
はいつくの極みなる市中の門巷に居住某と云る
家れをみくこそきたくこと見るに思はしる
かゝやものゝ上にあり人あれと居住しる恨て
きたくき張ふらるよ及ぶすうくれ人をみあてられ
く門おきたくく市中あけきのうき世ようや
まくくれ又渝せたはみんうをとて家を導ま
門さくをして拙まくよ人を驚るし居住のれよ
いてうきふおくうとる世のさ毋うれ恐とげま
食傷して恨よ人のうくしたるくし
四角ある浮世れ恨多ハきまいろう

剃髪辯

生てく天地の間ありて姿あるくくきる
ありて浪名ある〜いてや世をのれてうき世
の名をあくくちんまくの姿まつあくさくむや今や
さうやきの世るとやあてハ禿僧の束髪や似ん
釋氏の剃髪ようくと模稜のようさるる
うとあくくく生涯の仕上あれと一大事の分別ハ
ありとさるむよまるあくかのこまのよ
あくもつくく祐くに只あけられの自由をとるれ
文あくくこまくこまくこをくくる楊州の鶴ハあま
みくまりくくとこれと吉田の法師まくをみハ
いるる所まくまるあつき法師紀行ハくく

[illegible]と[illegible]に[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]のあるさむやるあるあるさるあるあ
[illegible]は垢ちみを枕に沈つるさむいたもたよ清る
へ[illegible]えをもひとをいたもひをてつあるよ剃まま
きまりあるされを遍照うよみうんるもちぬを今
八世におるもとも官路の険難をちのきをし功
をもるぬ名をそるけぬちまれるきふ耻あきに
[illegible]今世老の永をりをきを浮世の塵を剃をつへき
いをうをしとおるきらんやるれとてをを拾のひ
るをとをるうるふもを[illegible]されを儒者の教を
うへはあまり機嫌のようぬい父母の遺體を
の咎をあるへ[illegible]るふ一朝の怒を喧嘩を起し

二世の契を心中をちうして我とうう弟を[illegible]
[illegible]別をするのを[illegible]に義あるへ[illegible]れ
を[illegible]十寿[illegible]をうんをを重ををちぢき
惜れを爪も剪かるるを[illegible]を[illegible]も
蜻蛉のうき名をつるきてうんるを[illegible]をもをつ
めるへしをの上を奴[illegible]世に[illegible]まをは
をを剃髪の[illegible]おいをしをもの世にいを
[illegible]るをあるいをを[illegible]を[illegible]る我
をうこれをるあるをうふの遺體をいをすを志を継
をいをいをへしをもをを釈つをは経の[illegible]
[illegible]をはいををるぬを生ふき世のをりをを
をはれも牡丹の花をを排ひををもを色乃

山もきたにかゝるむさぼれとも人ゝ驚者も出家師も
利こゝろにて書学ハあるゝ毎ゝもよゝすまして
書こゝろわる成義世の八要町ゝハ四部の四弟子の
比丘尼をあつめて比丘も侵法塞も入家出て乞食
ハ紫の袈裟ねと言家の朱をも奪んとせられと
備もあるゝ毎ゝの自利まて四弟子性ハ出のも
のゝまゝまして引あるゝ毎ゝ入道ゝ以
ゝゝ人を欺ねと法師まもあるに祈門ゝもゝ
場ゝあてゝ多ゝさいへ世のゝひまて学義ハ
ゝゝす湯茶ゝゝと沸せゝゝの名ハ薬猪と
よゝれ薬ゝゝは用るも学統ハ学ゝんの名と
のゝ出ゝされと容れあるゝきなる妖物のゝとゝも

もゝとのへゝムしも増も入道の号あれと我と法名と
も法師ゝよゝゝ人に限へ
別ゝて月まゝての影法師

自名ゝ説

自名ゝ説

遁世ゝ姿ゝて定ゝあゝゝゝ世ゝ名ゝも
あゝゝさるゝ二字よゝあゝゝはやと名と出
字と出ゝ人ゝハ父母も世にまゝ出家法ゝ
嚬出ゝれと忠孝の字義とゝゝ比のまゝ
ゝやいへゝゝむゝ文四書古文の抜書もあゝて
人の元ゝゝまして陶ゝ集のゝゝあゝ
る限者ゝ出ゝを立て骨ゝゝに名ちゝる

[illegible]博識の門より入て意味深き[illegible]
[illegible]まい耳遠りれと[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]
一人[illegible]講釈[illegible]
[illegible]浄蓮[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]
つけて[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]人の味[illegible]

これハ何のゆゑなるかとて[illegible]
[illegible]て自然[illegible]
[illegible]

[illegible]

種旭画賛

[illegible]家[illegible]
素人[illegible]
疫神除の[illegible]
其剣と[illegible]

雪渓序

こゝ和泉の里に世をのがれて秋の月いと面白く
ながめ侍りしに山無の眺望ふかき色の
りきはこゝにまさる所なしと我もさい人も申しつゝ
言葉新しく成とい事あんとかいひ一くもあれとも
の文焼のなるれうゝい林下ちんそうさ一人をとゝ
ともいひ詩をもつくるこゝろをもてまうさい
小野一ゆれ中ゆ寺にて手ふり
月のまゝにくれもかりきりうのこゝろ歌
葉をうつすこゝろまてのこゝろ作りうれすされと昔
より雨を詩ゆ一あとて神泉苑の四ケ交
の術ハ半僧ゝる僧の法力をあゝらひ小野ゝ宮き
児女の清ゝのゝつゝあゝりあれ理屈ゝ

能因の天河ハ古書ゝるゝ中てゝのこゝさうゝ
雨ハ五穀のゝゝゝゝ言ゝ半の場ゝてゝきゝ
ゝゝ雨と詩ゝゝ神あゝは言ゝ神ゝ
ゝゝゝゝゝゝ感意あゝは俳諧も感ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ相俳のゝゝゝゝ
てゝれゝ粉言の出いゝを為ゝにゝゝ
名にゝ富士のいゝきゝ一言ゝ内ゝあゝ半掃
業に言ゝをゝゝ半ゝの俳諧もゝ長のゝの
ゝゝゝゝゝゝゝ力ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ不ゝ言の赤和当を先達ゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝ丹海を抽ゝ一長必猛の壇
ゝゝ言清の一世ゝゝ俳ゝ

言外意味をふくめてあり

脇説

世を捨る法師の物ゝ人をうれへなげかせて
うけあきれ心地そなたにはせ参よ一鉢乃
まゝけも喫氣にさくられあるもの藜もみそうて
物ゝ炎のことにうゝきはもあり多のかハ
又ゝ多ものをよろこもゝ心の慾ちきを
よろこもゝ我ハ世ハ捨れときわゝ乃
猿を世てゝてのひよりあるれとかとも
凍餒の患ハいゝすゝ出干も煤きも世法多
助すをとゝ多ハ用のものとゝハつすゝ

ある調文もるゝ品をとゝ只一用ハ物のゝ
ゝ心といゝハ一物ゝ多用ゝ心をとゝ
物ゝハ定規ゝあるゝ煙ゝ物とゝ
法中ハ法ハ濟ゝ火燈の ゝハ代ハ品ゝ
ゝ一物ゝ多用の省略ハ天地萬物
その法法多ゝ多ハ呼吸を加ハ物
喫く用を兼ハハ飲食ゝ言語
乃用をゝ天ゝ人をゝ言
の名をあゝ目をゝ品ハ因果物法
ハのゝらゝ帳世法の名物ゝ一ハ
天の物をゝ法ハ又ハ名ゝ眼鏡
の名ゝ身を紙のゝ天の

之則ち聖人紙に書物の中に
猫とよまるの書をたれかみるべきや
ともあれ何の益なきに長のうち
の時なりしかの今河殿まうてきりぬ時
天地冥加の時徐義ちきりの世あるべし
その知りぬるいんよ我くちの不角をしりて
飼てもよい吟をもちひ生しくのこるぬ料
紙やものふうもつ折もあんもなる調
文のもしは仕出の風流ありこれは細工乃
面白しかもしらく人のうるあるのみく
ものもれを心をなるさにうれしきあるは
ちうちうの面のつるいうちるのみたるいはせ

こゝよ世みもをきはむ一雪月の縁をうち
きく紙の猫を飼しをやてつおの書にうち
ゆくさりしをさわきくのみをもよ行て
五侯よもれ軍ものこらもあるむやもるを
猫はいかもいうくてきたるいるき
りれてつおまて捨くぬ出るをもる紙
をもつに我いまて斗撫のみるあるるまれ
猫に食をうをきんうの人のをもやうし
をくくうの猫とさるるみうもし豈猫山をあ
さくもや

第不孝文　駒六林

老きしかや子にあらさるを如何にせんと
なくさまれて魚よりをとこを君を女を失ひて
世をつくす涙袖を浸し一生を浦のいさみ樵を業に
くらして為るよりよりくのおやうきまくるきり
ハ例の天命を逆きて宮ちやうにやとちわすく
怨憂の物をとめ只あきふめよ命をよと君ら
かくよりとまりさるをうを言くうきうき世に寂
ひの菜屋を給りあるハ樹木の菓子を拾ひ
をもつて祝ふらんいとて解ける涙うるん何を果
拾ふ悲をまきれん果ハ出又のうでくを怪とくく
しくかひ泣くくハ君を見たくるる
しく魚を吊るるくく我ひをきしにけかの君女を

先くくりされハ君うん我くくもりなる君又をしまて
我を案をこ一我うの魚ゆして魚をとるむ只ちあけき
なくくるる歌きもあるをもあけきあけおくして
中くまにあひきれ森に秋ちけてハ船のをあり
うをきをかをくむ七くの日の法ゆをあり行の涙
手行ふ城一百ケ日の墓をにハ百行やくすあるて
やむまして一周忌のかい解ふその日の夕の猟ハ断て
くる例糧つけくを完てくもいくされも節の
猟をあくく桃ふ離の法ひ日ふハあくまくそのを
をけ盆の踊の手拍子ハ人をあ物ふこくくに
をくみハ一生の為ちあくをくされてをの祝
をくあひてくくまれく調ふ月にをくく

[illegible]

[illegible]世の倒の別あるを出てこのこせ一事の法も思ひ
て引やり捨るあれしものも少なからず〳〵男女
乃愁を免れ〳〵のひとうとき〳〵不仕合なる
事とすべきものハ一うて喜我今先達乃教しく
君といふ君まと先達の教しく為あらの為の上
をかいまむへき只あるし〳〵世〳〵のかと未さちあき
家こてうし〳〵

秋の暮先くとふらう秋のそら

賛補彼茶碗詩

大極の氣こそよ彼生〳〵陰陽となるその陰陽の
又あはうよ夫婦いあるせの契ともあれりおのれ
叶茶碗のまうに白のうまあきのこふと一〳〵
〳〵みて明の盈虛を示し舍者定離を示して
離るあり又あるるて佛も我を打のへき獨よ
叶のよ文あるむを我よ求む我田先生の言にき
と駿ハ壯なる時一日千里とそ老とふ駑馬
も先〳〵むてして駑馬の老さるあ何のふを
〳〵むて〳〵先〳〵小よあるる護花園あと
そこに一人の好事あり〳〵こそ求む〳〵し
あれ〳〵こそあるれ只さのあくとあるよ
先〳〵我ハ火燒の山にあるこそ甚文

成瀬り姫の茶筅のあやまちて懲りくいうまもと
と敲くとうと果て金玉の響あり嗚呼茶筅
のうきたてはけえあるしをあざみものを刀掠打の笛
もちの瑕ありて瑕あるを繕目をとるむるもとる
嫦娥ら天上の藥ハらさきるを人間ふ石うるとい
ものもうるもや

きるれるを繕ゲまるきらつけ裳ものも
彼世世平よあるむうきり きを

贈分平菴文

平易とはくうう分とれうをとはふさるむ
りとは菴只きるれるにて呼く餘金とく

さむへき姫越のうるあるしの繕乃
孤きるめるや漆きく汗のこうこ建ゐるふる
ハよるとやみるんむつうるやとはいるあるみ
ふハきるをされと赤面ハものまに しうる屋
るるも月まつ嶺ハあるし方あるノ屋宮宮の
るのりハ一町きりもをるるしこるよ一角をるるを
をりるよ四時のるる景行生をうるるくいるつき
されと屋ちうきよしるるうあれをつ生きるいるも
るるる只服乃乃姿をる

絵の中にるるるるのあり
るるるるるるに掛きるしの月中あり景四乃
をとをるしるるハ男苗を秋ハまるるをるるハ大根

引ときうゝ又よ一物四用にもゝ紅あさ白句
ゆゝさきもきよへゝ白と結按の一語にきゝ白
ておゝり物ゝふもりゝと

脇須

紐を不用の物ゝふ我も詩ゝ一人の数ありされ
と他の一寸ハ長ゝ一天ハ長ゝ世にやゝきき
ものゝゝもむふまん素ゝ紐ハ先ゝ生ゝ
紐ハ物やゝ金ゝ素袈裟の結もゝ物やゝ
いゝ之織の紐ゝ及ゝ世にあゝて物を費
ゝゝ似るゝゝ人の体ゝ不用を論ゝ男の
気ゝりゝいゝ論ゝ

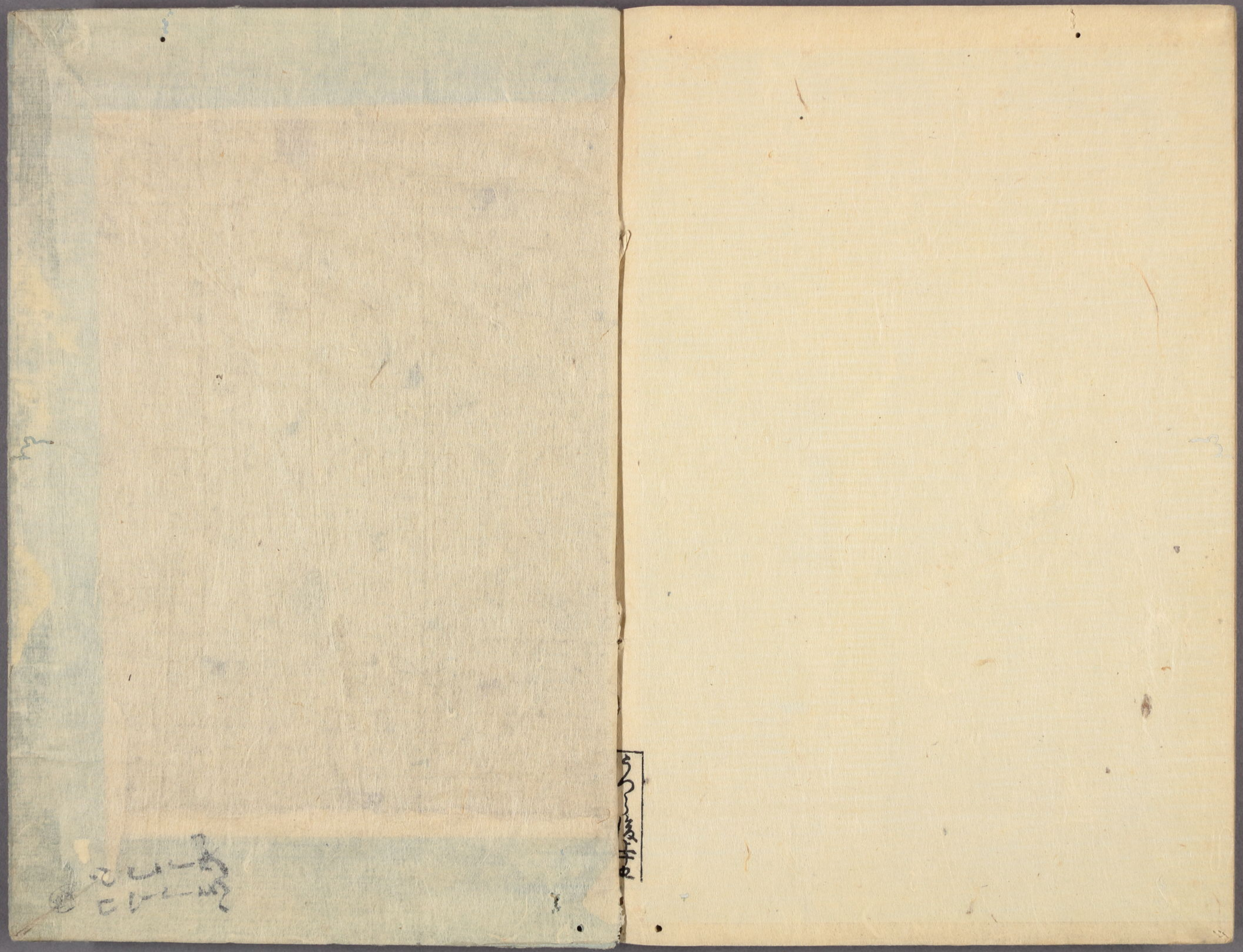
こゝゝとゝ拂ゝ按ハ渾沌の面ゝげゝて世
ゝゝゝいゝの紐ハ頓死急死のゝ
ゝゝゝ
ゝゝ多ゝ物ゝ按のゝゝ
ゝゝ項羽ゝ山を拔ゝ力を叶垢を
ゝゝ漢文の
ゝ我朝ゝ人を嘲ゝ紐ゝ笑ゝ
ゝゝ紐ゝ
ゝ天津神の
ゝ
ゝ麝香の狩人
ゝ紐の結ゝ

猪田岳神をあがめまつりしは耳も及ばぬ奇しき
れいかく風雅を大切あれと今は我身を行ふ
とされを猟ハうちもとにもとめもく
猟のトうちんハ何ものもやはらかれよ
ものもとに天にこの日の猟あきら
きれと上下の品定ハやはてうより品さとを
ものとも

友とともむ猟あり秋の宵

金嶽樓記

樓第三の南に金嶽とよぶハいとよきあき
富士をむかへてもちろん山樓の眺望東南
ひらけられたかの金嶽のうちあるいとよ里吟賞の
内田あり此あり村あり神社佛閣のうるわし
なる画に似たる画なるに及べるとて竜興寺より秋吟
して花まつ雨を俗して猪投山の猪のまよ雲あき
月を望まく下戸を餅にまつく名をて蓬ヶ島より
改をめるまは上戸ハ酒の中りをもとめて麹ヶ池より
延を深をへ〜ものとを主客文章に富士をこてよ
まり遊ぶ者皆一時の英才をうして新詩百篇瞬く
うちよりあり雅談一日あくびをもらすとなく
花もこてよ向ひとくるあり香を増〜天津宮の徒も
こてを金石ふ定むるんむも辞もるくまき
をあり詩歌の程ひよ俳文ひよ俳諧の

又と詰て甚だいとゝやさてゝ初んぬ孤ちを捨ひ
てゐを探きあくをとすとて縁を深くしのあるゝれ
さるも不才なる何を以て孤よあて何を言て灰汁
よ代むされども我賀ちるるあり世に祭の桟敷の
幕毛毬よ鍋毛とゝもうゝに權兄一日の栄をなす
ハ甚だるあく動ってるれたあり此印によりてて
此機ハ年ゝに松樹千年の久しきを期そ〳〵
さるハてのるるあく動うしてさるは〳〵ぬ
名山あるまてあり古られてあるゝ老をちるゝ昔よ
業代の齢をるゝら辛ふ此機よ簫を吹く風に
かゝてゝ変化せむとるる我者る幸にこゝにを
あり。老琴の変ふゝは其のゝ衣の岩智を負らく

甚日の供ふハゝつるへゝるゝてゝ
月花よ孤ふ富士ゝる日の終り